

An Introduction to the Historical Materials
"Chikuko-zu Itado-e" which are Held at Joshoji
Temple and "Kacho-zu Itado-e" which are Held at
Koganji Temple

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47139

史料紹介 金沢承証寺・高岸寺の板戸絵

鳥谷武史¹・吉岡由哲²・黒田 智^{3*}・山野 晃⁴

2016年9月23日受付, Received 23 September 2016
2016年11月16日受理, Accepted 16 November 2016

An Introduction to the Historical Materials “*Chikuko-zu Itado-e*” which are Held at Joshoji Temple and “*Kacho-zu Itado-e*” which are Held at Koganji Temple

Takefumi TORITANI¹, Yoshiaki YOSHIOKA², Satoshi KURODA^{3*}
and Akira SANNO⁴

Abstract

“*Chikuko-zu Itado-e*” and “*Kacho-zu Itado-e*” are pictures painted on wooden doors. The former, held by Joshoji temple, is a painting of two tigers in a bamboo forest. The latter, held by Koganji temple, is a painting of flowers and birds. These are particularly important works among the paintings made in Kanazawa city in the first half of the Edo Era.

Key Words: Joshoji temple, Koganji temple, Kanazawa City, picture painted on wooden doors, image of a tiger and bamboo forest, image of flowers and birds, image of rabbits

キーワード: 金沢承証寺, 金沢高岸寺, 板戸絵, 竹虎図, 花鳥図, 兎図

I. はじめに

石川県金沢市の寺町寺院群と呼ばれる地域には、藩政期に浄土真宗以外の寺院が招集され、寺院密集地帯が形成された。またこのような背景から、近世には加越能の諸地域より書画工芸が集積され、現在も多くの文化財が寺院に所蔵されている。本稿では、同寺院群に属する承証寺および高岸寺の所蔵にかかるとる板戸絵を紹介する。

II. 承証寺

本隆山承証寺は、天正17(1589)年に加賀を領有した前田家の家臣である服部佐渡守が前田利家より寺領を与えられ、金沢市尾張町に創建された法華宗寺院である。のちに古寺町へ移り、さらに元和2(1616)年ころに現在の場所に移転したという。

承証寺所蔵の板戸(図版1~4)は、もともと同寺の本堂入口に配置されていたが、現在は外されて保

¹金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Graduate School of Human and Social Environmental Studies, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

²金沢大学大学院人間社会環境研究科 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Graduate School of Human and Social Environmental Studies, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

³金沢大学人間社会研究域学校教育系 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Faculty of Education, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

⁴金沢大学大学院教育学研究科修士課程 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Graduate School of Education, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

*連絡著者 (Author for correspondence)

管されている。長方形の引手が付けられた183×132 cmの引戸2枚からなる。2枚を1枚の画面として片側2面に彩色の萩兎図、その裏面に墨描の竹虎図が描かれている。描画部分の素地となる木板は、それぞれの幅が揃っておらず、上部と下部にも異なる幅の材が用いられている。萩兎図には、左右上下4面それぞれに、何らかの部材を当てていたかのようなX字状の跡が確認されるが、板戸の対角線に沿っているわけではなく、補強の痕跡とも断定できない。

この板絵は、石川県在住の日本画家山科杏亭により発見され、昭和36（1961）年8月6日付の「北國新聞」にはじめて萩兎図の図版が掲載されたその後、平成11（1999）年の石川県立歴史博物館の特別展「うさぎワンダーランド」展にも出陳され、やはり萩兎図がカラー図版で掲載された。

左面下部には草の中で体を右方へ向けて振り返る兎と、跳びはねた後に体を捻って着地しようとする兎が円環をなすように配置されている。右面下部には草の中に蹲った楕円形の兎が描かれる。動的な左面に比べて、右面は静的で閉鎖的な構図となっている。また、右面上方と左面の上方半分以上を埋めるように萩が生い茂り、その枝葉1枚1枚に胡粉と緑青の濃淡を巧みに塗り分けた装飾的な様式をもつ（図1）。萩兎図は、秋草である萩と月中の兎が仲秋の名

月を想起させる図様としてしばしば描かれてきた。月中の兎＝玉兎は、古代中国にさかのぼり、日本でも7世紀の法隆寺玉虫厨子に確認できる。また萩に兎の画題も古く、14世紀半ばの東寺所蔵「弘法大師行状絵詞」巻1には佐伯直田公邸の板戸絵があり、萬野美術館所蔵の狩野安信筆「萩兎図」や大樋美術館所蔵「萩に兎図屏風」など枚挙に暇がない。また、円環をなす跳ね兎は、波兎図の中で描かれる場合が多く、絵画や工芸品のなかでしばしば取り上げられてきた定型の図様でもあった。

本図は、こうした兎図の圖像伝統のなかで制作され、現存する兎図板戸絵のなかでも比較的古い優品といえるであろう。

とはいえ、これまで比較的状態の良い萩兎図ばかりが注目されてきたのに対して、裏面に描かれた絵は、経年による黒褐色化によって判別が困難であったことから、その内容に詳細な検討が加えられることはなかった。そこで、2015年11月19日に調査を実施し、可視光撮影に加えて赤外線撮影を行った。

調査参加者は、執筆者4名に加えて、金沢大学大学院教育学研究科の大塚有将、人文学類4年の横川七海である。撮影は吉岡由哲が行った。

調査の結果、裏面に描かれたのは墨画の「竹虎図」であることが明らかになった。霞のかかった竹林を

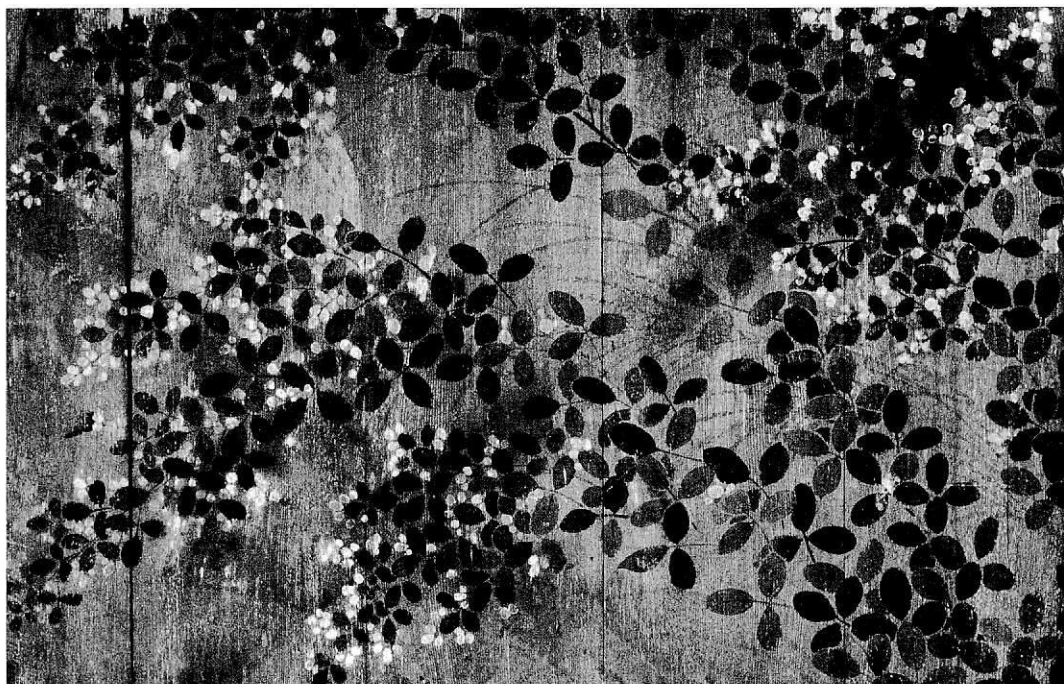


図1 承証寺蔵「萩兎図」〈部分〉。

Fig. 1 Part of “Bush clovers and Rabbits” held by Joshoji temple.

背景に2頭の虎を描いた図様で、右面には頭部をやや左方に向けた虎、左面には右方を向く豹を配した構図であった。また、短い墨書が画中に数点見出されたが、現時点では何を指し示しているのか不明であり、今後の課題としたい。

「竹虎図」の右面に注目すると、左側に1本の竹が描かれ、すくくと中棧を貫き、霞を越えて上へと伸びたまま、竹葉を枝垂れさせている。その右方の画面中央には、体幹を右方へ向けながら頭部を左側へ捻った姿勢の虎が描かれている。

前脚の屈曲によって前傾となった前半身の背中に描かれた縞模様は、後ろ脚付け根で獅子を想起させる渦状の模様が変わる。腰部は高く捻り上げられて、そこから逆S字に伸びる長い尾が中棧を抜けて上方へ向けられる。見開かれた両眼は右上方を見て、板戸に正対する観察者をにらむ動的かつ開放的な構図と言えよう。

次に左面へ目を移すと、こちらも天地へ伸びる竹林が左右に描かれており、左方の太い竹の樹幹に下半身を隠して、前半身を覗かせるかたちで右向きの豹が姿を現している。竹林に腰を下ろした下半身からは、長い尾が地を這うように伸び、右前脚によって前半身を起こしつつも、頭部は右方を向いたまま低くとり、左前脚は顎下へ添えるようにして持ち上げる。その視線は右面の虎を遠目に見て静的で、やはり動的な右面の虎とは対照的である。下部に描かれる草の描写は、右面に比べて密で、左右の竹林と合わせて全体が草木に包容された空間になっている。

虎図は、大陸渡来の吉祥画として愛好され、16世紀になると墨画屏風や壁貼付絵として大画面展開した。虎図が城郭や寺院の玄関口に置かれたのは、禅林寺釈迦堂の長谷川派による「竹虎図」が早い。名古屋城の本丸御殿に配されるなど、17世紀には城郭の大広間や寺院の方丈内を守護する目的で虎図が置かれるようになった。本板戸も、外界から寺院内部を守護するべく、本堂入口に配されたものと考えられよう。

今回明らかになった水墨の「竹虎図」の画題・様式からみても、本板戸は、やはり17世紀を降らない作品とみられる。また、両前脚を広げて後脚を伸ばし、前傾姿勢をとる虎を右面に、腰を落とした姿勢で左前脚を頭部の脇に添わせた豹を左面に描くという構図は、名古屋城本丸御殿玄関一之間西側に配置

されていた慶長19（1614）年の「竹虎図」（図2、3）と共通している。ただし、その画風は大きく異なるため、同一の制作者によるものとは考えがたい。



図2 名古屋城旧蔵「竹林豹虎図」〈部分〉(名古屋城博物館, 2010).

Fig. 2 Part of "Bamboo and leopards and a Tiger" held by Nagoya castle in the past.

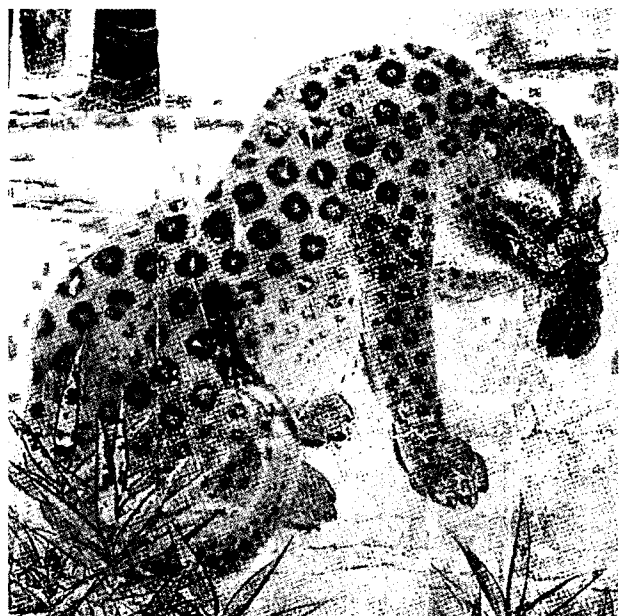


図3 名古屋城旧蔵「竹林豹虎図」〈部分〉(名古屋城博物館, 2010).

Fig. 3 Part of "Bamboo and leopards and a Tiger" held by Nagoya castle in the past.

本板戸絵は、金沢宗達会創立50周年を記念した石川県立美術館「俵屋宗達」展の下調査のなかで「宗達晩年の作」として発見された。特に、萩兎図は文化庁ほかに文蔵される俵屋宗達筆「西行物語絵巻」の「図案にひじょうに類似しているのでおもしろい」、竹虎図は「兎の図と同様柔らかな線を自由につかった宗達独特の豊かさをもった筆法の絵」とされ、本板戸の制作者が俵屋宗達に比定されている。

とはいえ、本図に描かれた虎は、比較的大振りな頭部と楕円形の両眼、連続した点をつなげたような太い墨線で描かれた胴部の模様、指の1本1本を黒く表現した脚先などに特徴がある。ファイナバーグ・コレクションの俵屋宗達筆「虎図」（図4）をみると、頭部が大振りである点は共通するものの、輪郭を墨隈によってあらわし、眼は少し吊り上がったかたちをしている。また輪郭線を用いずに墨の濃淡のみで表現された胴部には、緩やかに伸びた墨線で縞模様が入れられており、脚先は輪郭線のみで描かれている。その他、ヒゲや耳の描かれ方をみても、紙本と板戸という違いはあるものの、随所に画風のちがいがあらわれていることは否めない。さらに、後継者である俵屋宗雪の東京国立博物館蔵「龍虎図屏風」（図5）と比較してみると、やはり宗達の虎図と同じ特徴をもっていて、これも本図との相違点が目立つ。

加えて、石川県立美術館所蔵の俵屋宗雪筆「萩に兎図」（図6、7）と比較しても、長い耳やω状のやや誇張された口元をもつ兎の特徴が宗雪のものとは異なる。今のところ、作者を俵屋宗達または宗雪に比定することは難しく、その周辺の工房で制作されたと考えておきたい。

Ⅲ. 高岸寺

同じく寺町の一角に所在する妙栄山高岸寺は、加賀藩前田家家臣の高島定吉が菩提寺として鶴来町に創建した日蓮宗寺院である。数度の移転を経て、寛永13（1636）年に現所在地にいたるといふ。

同寺の本堂内陣右脇に配置されている板戸（図版5～8）は、菱形の引手が取り付けられた175×115 cmの4枚の引戸で、それぞれの板戸の下部には10cmほど継ぎ足されている2016年6月2日に調査を実施し、執筆者のほか、金沢大学大学院の大塚有将、石垣孝芳、山添良太および同大学人文学類4年の横川七海が

参加した。撮影は吉岡由哲が行った。

これらは、対となる2枚を併せて1つの画面を構成し、4つの画題の連作となっている。

すなわち、①内陣向かって手前2枚の内側は獅子図で、右面上部には岩にのしかかる巨大な獅子の前半身、下部には岩、左面上部に後半身と尾、下部に踏み下げた後脚が描かれる（「獅子図」）、②その裏面2枚には、水辺の背景に鴛鴦と雁が描かれ、右面につがいの鴛鴦、左面に滑空する雁を描く（「花鳥図」）、③内陣から向かって奥の内側の2枚には、左上方から流れ落ちる瀧を描き、その下方に山帰来らしき植物が伸びている。右上部に岩に乗り左方を向く兎、下方には岩陰に蹲る兎、左方を向く兎という3羽の兎が配される（「瀧兎図」）、④その裏面の2枚では、右下に上方へ伸びる芭蕉の葉と、その草陰に立つ雄鶏と雛、左には雌鶏と2羽の雛が描かれている（「芭蕉群鶏図」）。

ちなみに、鴛鴦が描かれる面の上部右端には漢数字の「二」、同様に雌鶏が描かれた面の上部右端には漢数字の「三」が薄く墨書されている。板戸の配置順を示すメモ書きかとも考えられるが不明である。

これら高岸寺の板戸は、もともと金沢市高雄で農家を営んでいた中山久左衛門家にあつたが、昭和の中頃に宅地開発のために高岸寺に移されてきた。中山家は、高岸寺の先代住職の実家にあたり、今も個人宅に同様の板戸が数枚残るともいわれるが未詳である。

先行研究では、兎の描写が長崎派に類似するとの指摘もあるが（図8）、左右2面に納まらない獅子図からは、狩野派の作風も感じられる。胡粉や緑青を使って草木を描くが、雄鶏の背景に伸びる樹木などに、漆絵を用いている点が特徴的である。また、獅子や兎が乗る岩のほか、鶏の背景となる丘の描写は狩野派などにも見られる抽象化された表現であるのに対し、動物や草花については、その種類が特定できるほどに写実的であり（図9、10）、細密な図を持つ絵手本や、あらかじめ実物をもとにした素描を用意した上で制作されたと推測される。こうした写実性重視の傾向が江戸後期より顕著になることを踏まえて、制作年代は18世紀頃としておきたい。



図4 ファインバーグ・コレクション 俵屋宗達筆「虎図」〈部分〉

Fig. 4 Part of "Tiger" held by Feinberg collection.



図5 東京国立博物館所蔵 俵屋宗雪筆「龍虎図」〈部分〉(名古屋城博物館, 2010).

Fig. 5 Part of "Dragon and Tiger" By Tawaraya Sotatsu held by Tokyo National Museum.

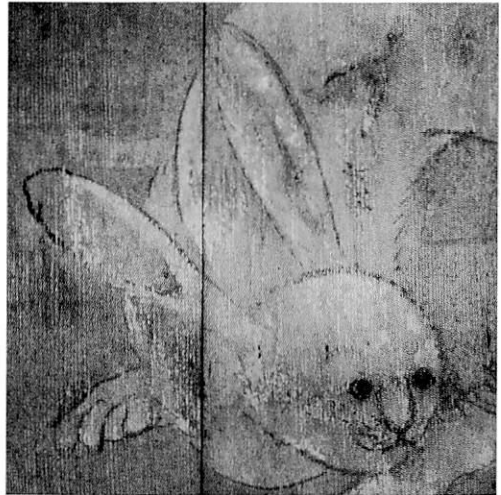


図6 承証寺所蔵「萩兔図」〈部分／赤外線〉

Fig. 6 Part of "Bush clovers and Rabbits" held by Joshoji temple, infrared photography.

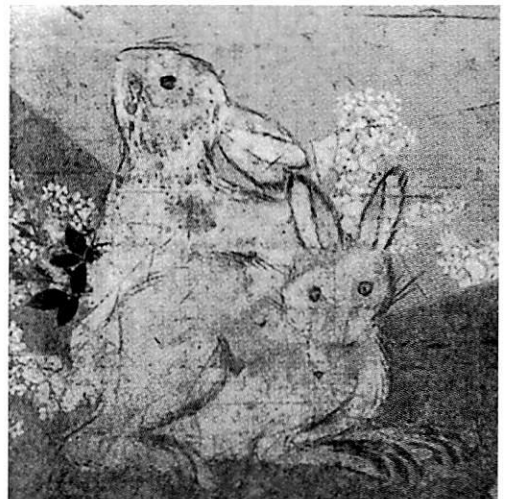


図7 石川県立美術館所蔵 俵屋宗雪筆「萩に兎図」〈部分〉(石川県立美術館 2013).

Fig. 7 Part of "Bush clovers and hares" by Tawaraya Sosetsu held by Ishikawa Prefectural Museum of Art.



図8 高岸寺所蔵「瀧兔図」〈部分／赤外線〉

Fig.8 Part of "Waterfall and Rabbits" held by Koganji temple, infrared photography.



図9 高岸寺所蔵「芭蕉群鶏図」〈部分／赤外線〉.

Fig. 9 Part of "Banana plant and Chickens" held by Koganji temple, infrared photography.

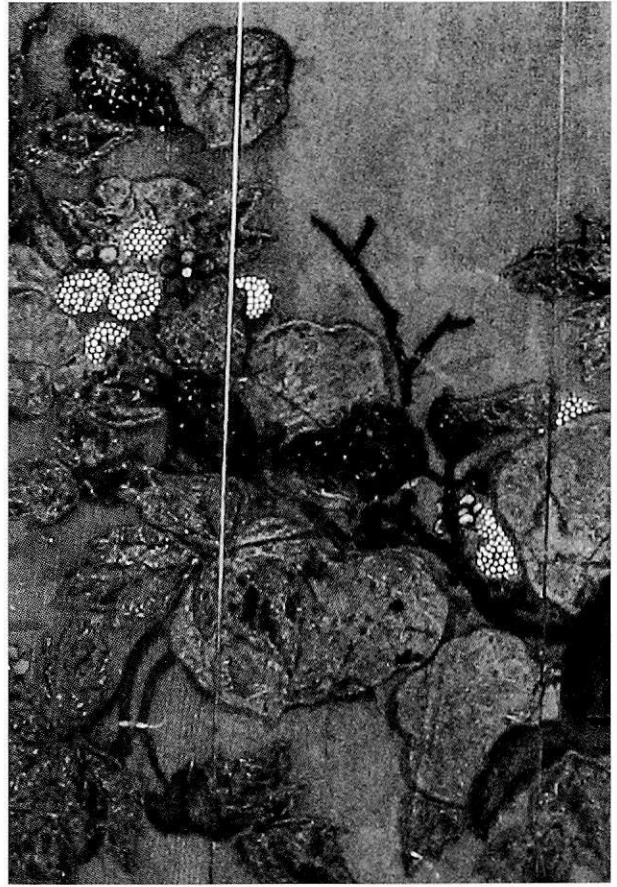


図10 高岸寺所蔵「瀧兔図」〈部分〉.

Fig. 10 Part of "Waterfall and Rabbits" held by Koganji temple.

IV. 撮影・調査手法

本調査では、承証寺および高岸寺の板戸絵において、経年による黒褐色化により描画内容の判読が困難であったため、赤外線写真撮影による墨書・輪郭線検出を行った。

赤外線写真は、素地に残存している墨書が、赤外線の特徴波長域を吸収することで光の反射率が低くなり、黒く写る性質を利用したものである。この調査法は従来から行われており、昭和初期には、高山(1934)が古文書での実践報告を行っている。

しかしながら、高等研究機関等で使用される業務用赤外線撮影装置は大型かつ高価であり、研究者らが広く利用できるものではなかった。そこで、撮影手法を工夫することで汎用デジタル一眼レフカメラでの赤外線撮影を可能にする方法が模索されてきた。

一般的に、民生機として販売されているデジタル一眼レフカメラには、赤外線を除去するフィルター

が搭載されている。撮像素子自体には可視光から赤外線まで感光する能力を有しているが、可視光のみを透過させることで、人間が見た被写体の色味に近い画像が得られるためである。そのため先行研究では、大下・下山(2014)の可視光線をカットし特定波長のみを透過させるフィルターをレンズに取り付け、長時間露光によって撮影する手法や、北田(2011)のカメラの機構から赤外線カットフィルターを除去する手法などが紹介されている。

今回の調査では、短時間かつ板戸の移動を極力控える条件のもと、調査、撮影を行う必要があった。そこで先行研究を参考に、赤外線カットフィルターを除去した赤外線ライト搭載デジタルビデオカメラ、およびデジタル一眼レフカメラを用いて、赤外線による墨書、輪郭線の検出を、次の2段階で行った。

- ①赤外線ライト搭載デジタルビデオカメラを使用し、ライブビュー機能で墨書の有無、および輪郭線を観察した。このとき、波長940nmの手持

ち式赤外線ライトを併用した。

②板戸絵の描画面上下それぞれの全図を4分割撮影した。また①で検出された墨書や輪郭線について、クローズアップ撮影を行った。いずれも均一な光量を確保するため、パネル型赤外線LEDライトを製作し、使用した。

手持ち式赤外線ライト、およびパネル型赤外線LEDは、一般的に販売されている波長850nm, 940nmの赤外線LEDのうち、テスト撮影で比較試験を行い、より墨書が判読しやすい940nmを使用した。また製作したパネル型赤外線LEDは、LEDを縦8個、横7個の計56個を等間隔に配置し、対象物から2mの距離で、縦2m、横1mの範囲を均一に照射できることを確認した。全図・拡大図の撮影では、カメラの対角線上、左右上下に計4台を均等に設置しライティングを行った。

さらに、赤外線撮影では可視光と比べピント位置が異なるため、撮影に際しては、板戸を垂直にした上で、ピントを調整・確認しなければならない。また重量物である板戸は撮影中の転倒も考えられるため、安全確保の観点からも、板戸を固定する必要がある。そこで、舞台・イベント現場で使用されるプラットフォームを使用して縦横180cmの木製壁面を仮設し、そこに板戸をはめ込み固定できる外枠を取り付けた。いずれも板戸設置の際には、枠や壁面との間に保護材を挟み込んだ上で、水平・垂直を測定し、固定した。

可視光撮影では、蛍光灯タイプのパネルライトを使用し、全図のほか、植物や動物などのクローズアップ撮影を行った。

撮影データについては、高解像度画像を得るため、RAWデータで全図を分割撮影したのち合成処理を行った。

V. まとめ

本稿では、まず承証寺の板戸絵について、可視光撮影に加え、赤外線撮影の成果をもとにして考察してきた。これまでも注目される機会の多かった「萩

兎図」については、萩の描かれ方に琳派の画風を思わせるものの、誇張された兎の表現に本作の特徴が表れており、「竹虎図」については、宗達・宗雪が描く虎図のいずれにもあてはまらない描かれ方をしており、それらの点をふまえれば、本板戸絵は17世紀の早い段階で宗達工房周辺の絵師によって描かれたと考えられよう。

とりわけ「竹虎図」に注目すれば、16世紀以降の城郭や寺院方丈に置かれた虎図の系譜に連なるものであり、外界から寺院内部を守護するべく本堂入口に配された虎図としては、殊に早い時期の作品に位置づけられる。

次に、高岸寺の板戸絵を検討していった結果、瀧や岩などの表現は抽象的であり、獅子の表現は狩野派の画風を踏襲するものとみられる。しかし一方で、群鶏や鴛鴦、芭蕉や山帰来などの花鳥は、非常に具象的な描かれ方をしている。こうした特徴は、写実性重視の傾向が強まる江戸後期の風を思わせ、本板戸絵の制作は18世紀と推定されよう。

文 献

- 石川県立歴史博物館編, 1999: うさぎワンダーランド. 石川県立歴史博物館, 金沢, 180p.
- 石川県立美術館編, 2013: 俵屋宗達と琳派. 石川県立美術館, 金沢, 64-65.
- 今橋理子, 2013: 兎とかたちの日本文化. 東京大学出版会, 東京, 23-71.
- 大下浩司, 下山進, 2014: 汎用デジタル一眼レフカメラを用いた赤外線写真撮影法. 文化財情報学研究, 11, 1-8.
- 北田仁司, 2011: デジタル一眼レフカメラによる近赤外線写真撮影. 文化財写真研究, 2, 72-73.
- 城野誠治, 2007: 近赤外線撮影で得られる情報について. 東文研ニュース, 28, 10-11.
- 高山定雄, 1934: 古文書の赤外線写真. 史学, 13, p.146.
- 名古屋城博物館編, 2010: 虎と玄關障壁画 武家と玄關虎の美術. 名古屋城博物館, 名古屋, p.128.
- 日置謙編, 1942: 加能郷土辞彙. 金沢文化協会, 金沢, p.291.

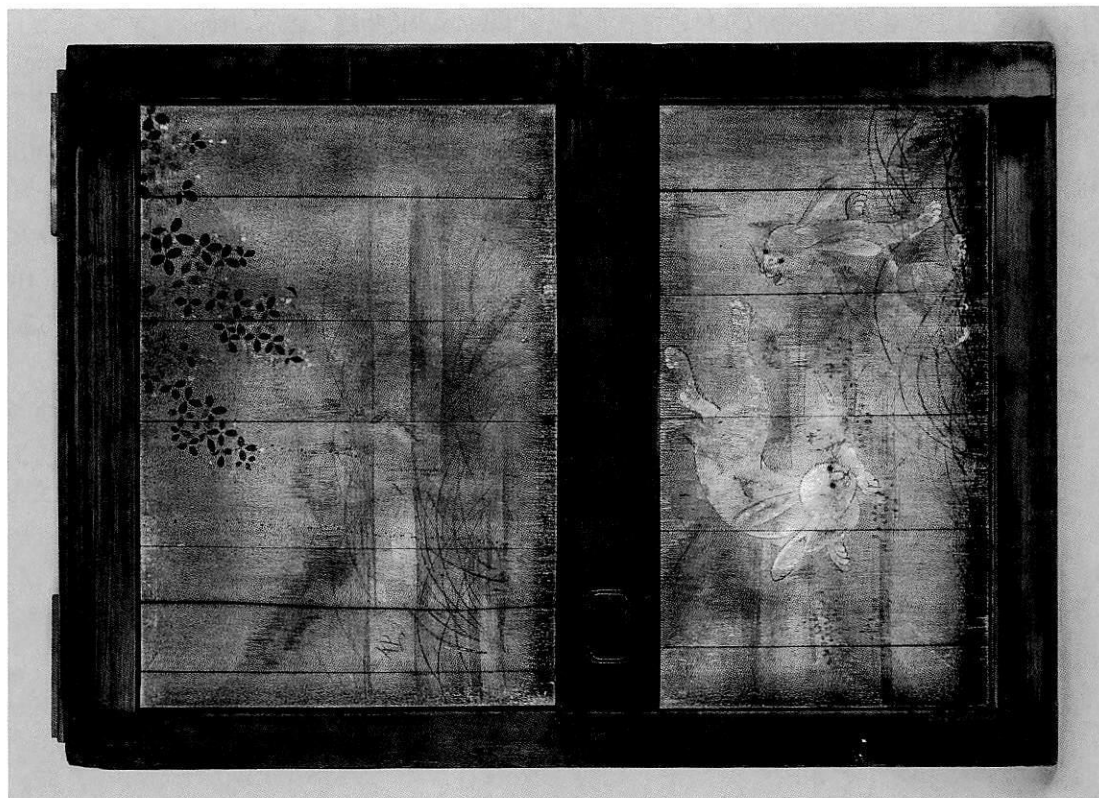


図1 承証寺蔵板戸絵「菽兔図」左（赤外線）。

Fig. 1 Left side of "Bush clovers and Rabbits" held by Joshoji temple (infrared photography).

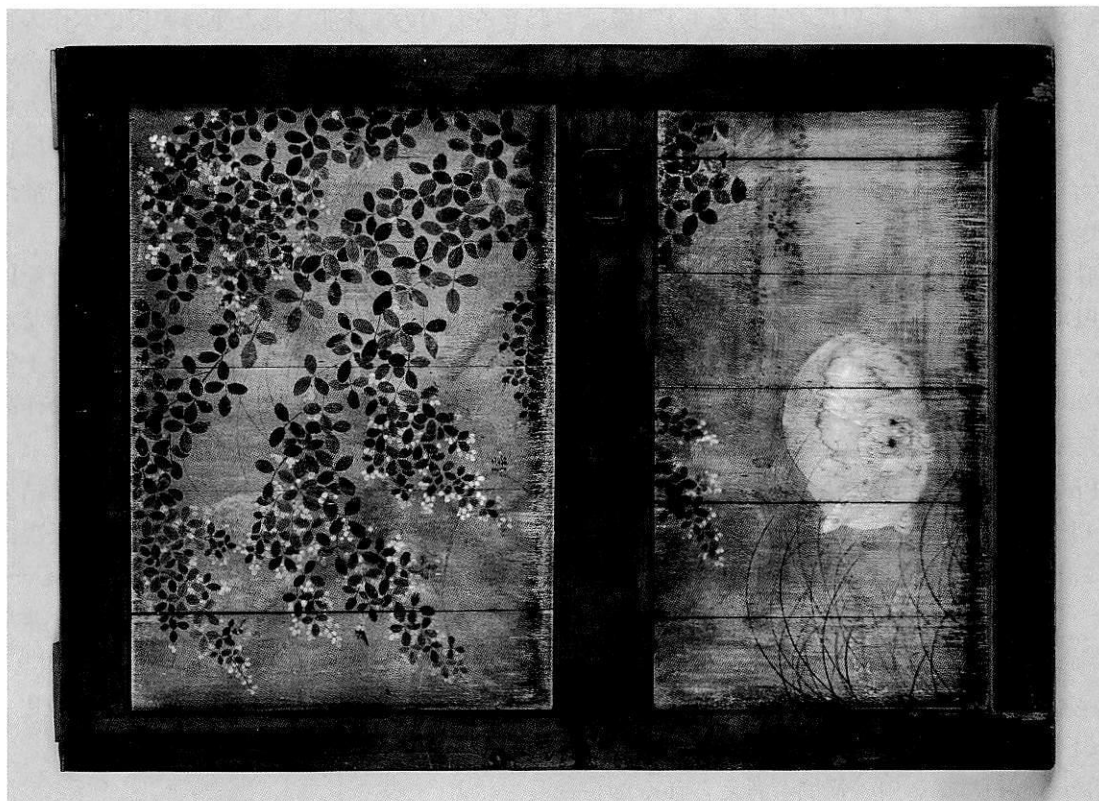


図2 承証寺蔵板戸絵「菽兔図」右（赤外線）。

Fig. 2 Right side of "Bush clovers and Rabbits" held by Joshoji temple (infrared photography).



图1 承証寺藏板戸絵「菽兔図」左（可視光）.

Fig. 1 Left side of "Bush clovers and Rabbits" held by Joshoji temple.

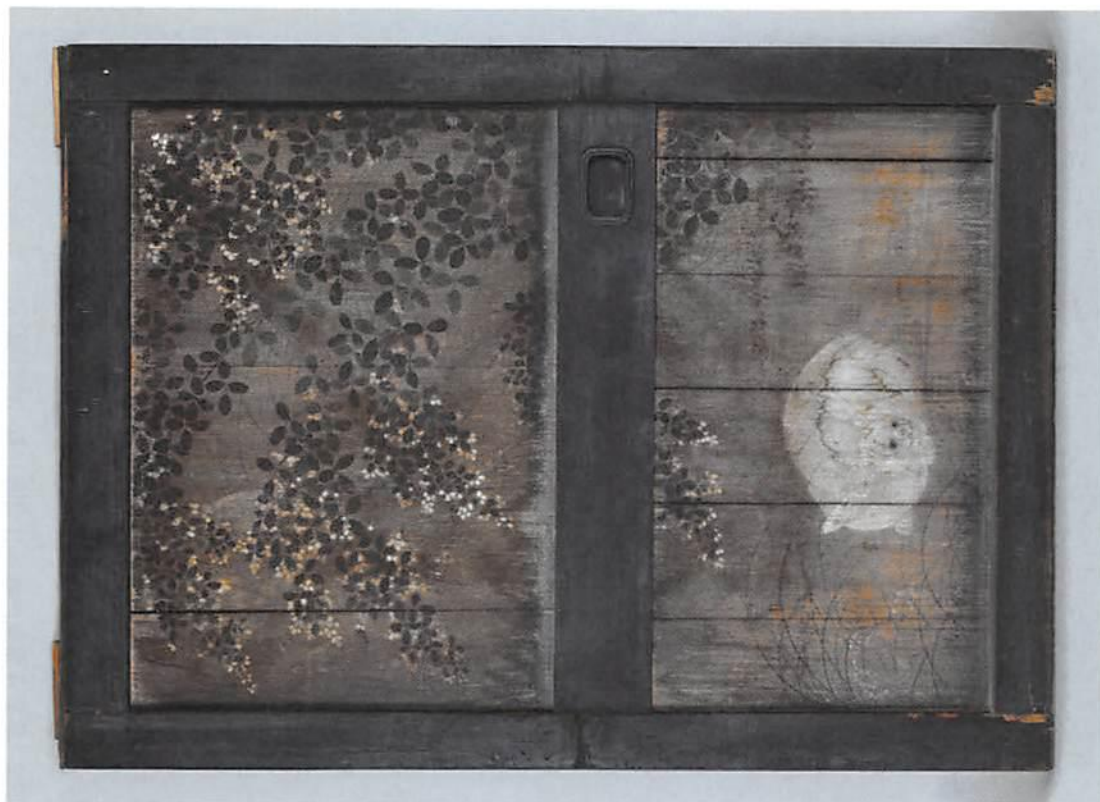


图2 承証寺藏板戸絵「菽兔図」右（可視光）.

Fig. 2 Right side of "Bush clovers and Rabbits" held by Joshoji temple.

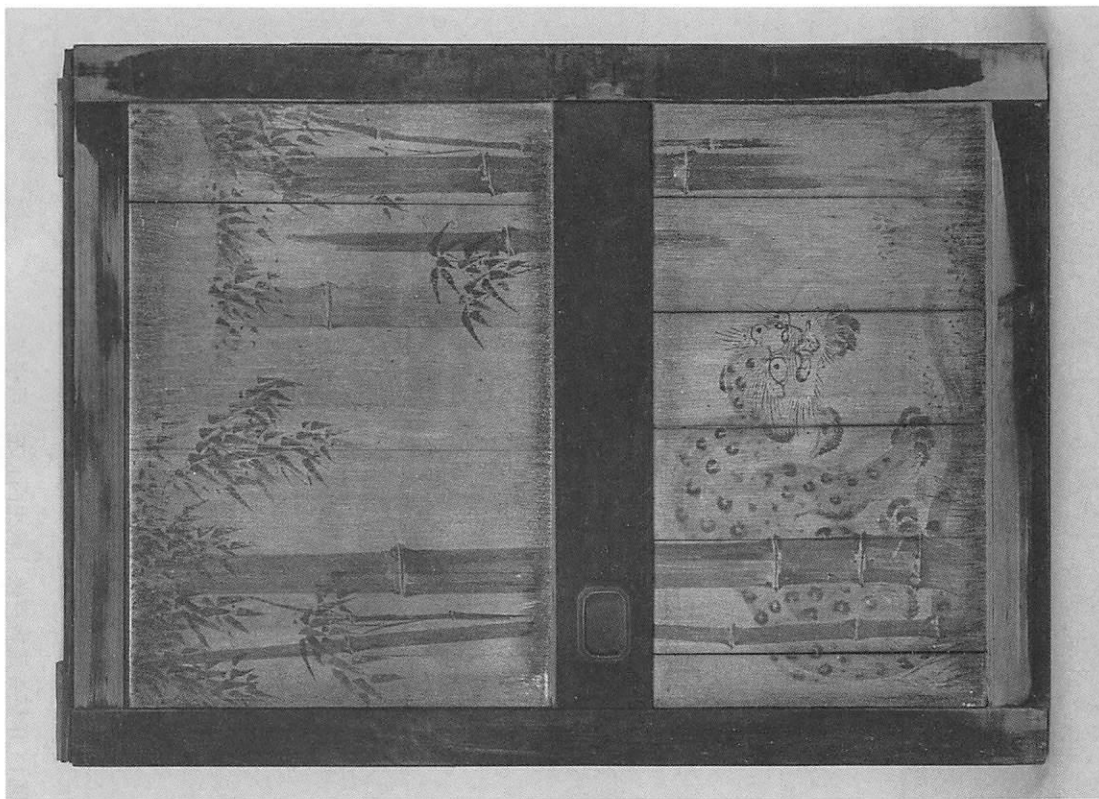


图1 承証寺藏板戸絵「竹虎図」左（赤外線）。

Fig. 1 Left side of "Bamboo and Tigers" held by Joshoji temple (infrared photography).

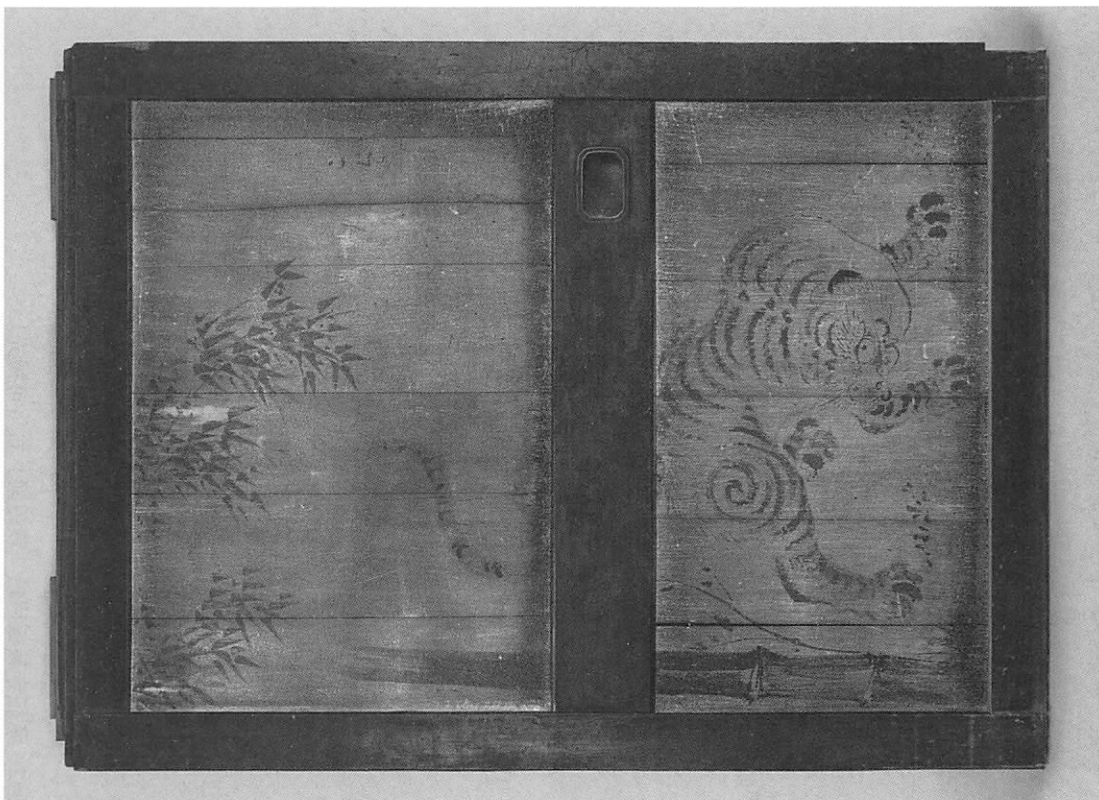


图2 承証寺藏板戸絵「竹虎図」右（赤外線）。

Fig. 2 Right side of "Bamboo and Tigers" held by Joshoji temple (infrared photography).



图1 承証寺藏板戸絵「竹虎図」左（可視光）.

Fig. 1 Left side of "Bamboo and Tigers" held by Joshoji temple.

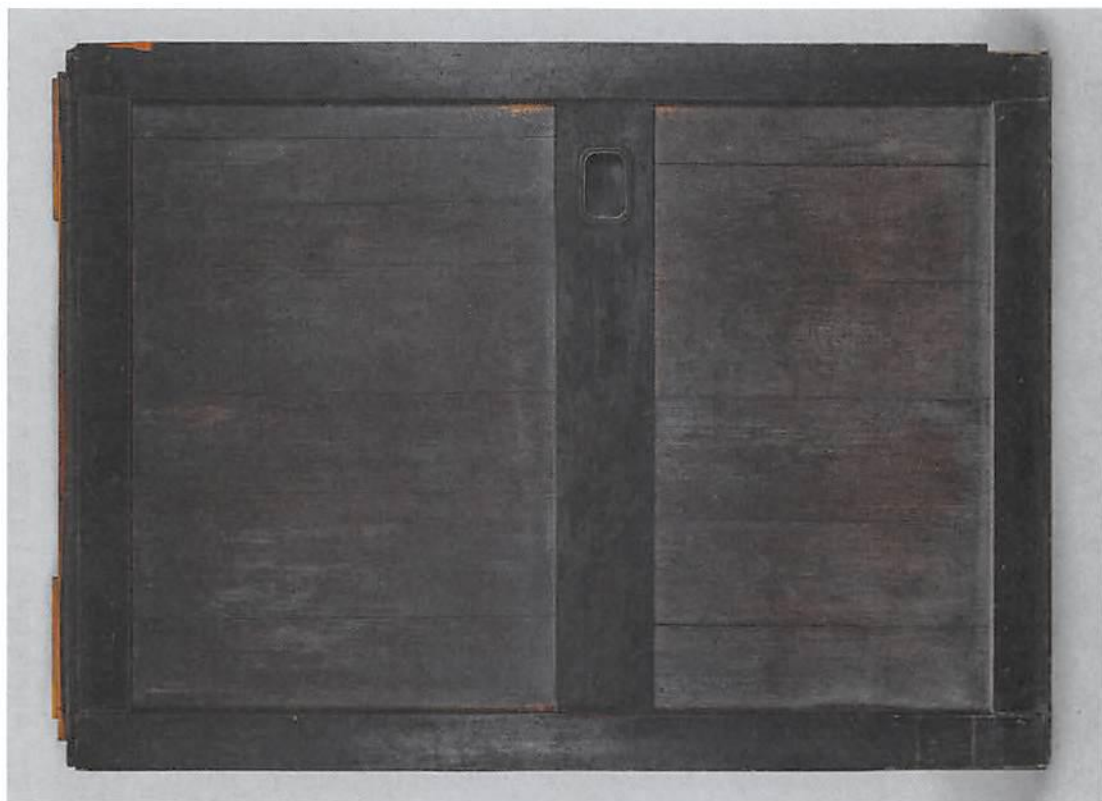


图2 承証寺藏板戸絵「竹虎図」右（可視光）.

Fig. 2 Right side of "Bamboo and Tigers" held by Joshoji temple.

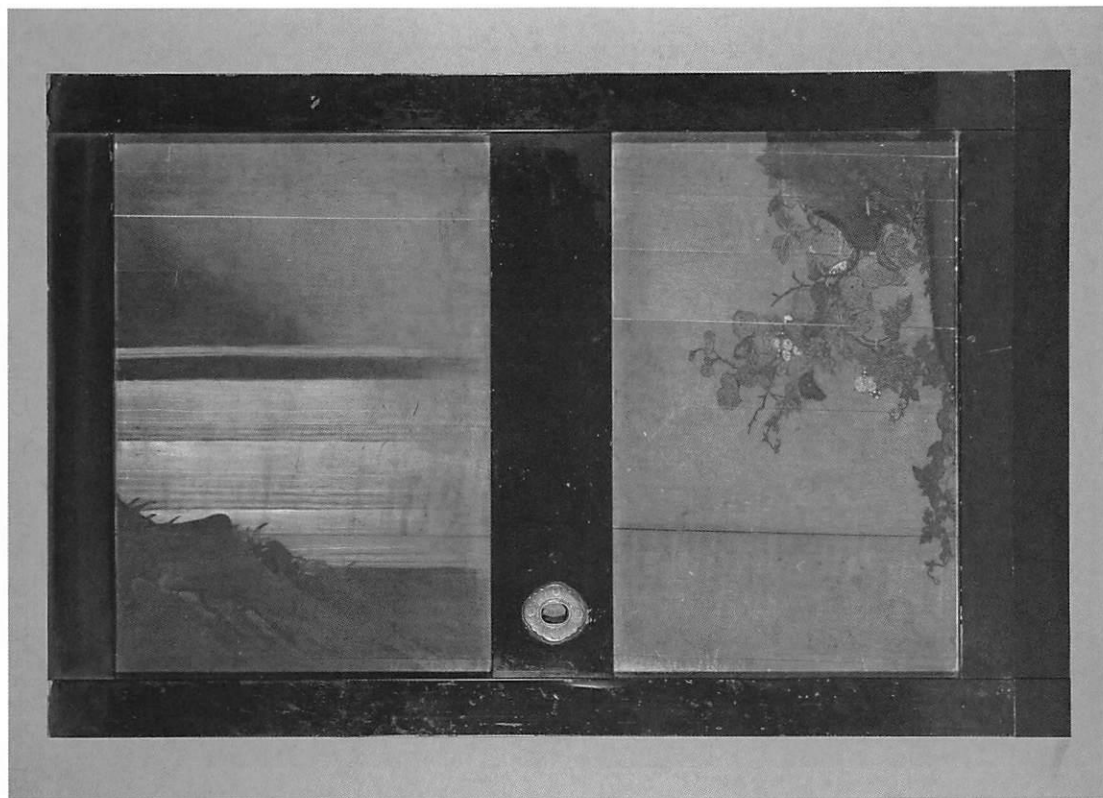


图1 高岸寺藏板戸絵「瀧兔図」左（可視光）.

Fig. 1 Left side of "Waterfall and Rabbits" held by Koganji temple.



图2 高岸寺藏板戸絵「瀧兔図」右（可視光）.

Fig. 2 Right side of "Waterfall and Rabbits" held by Koganji temple.

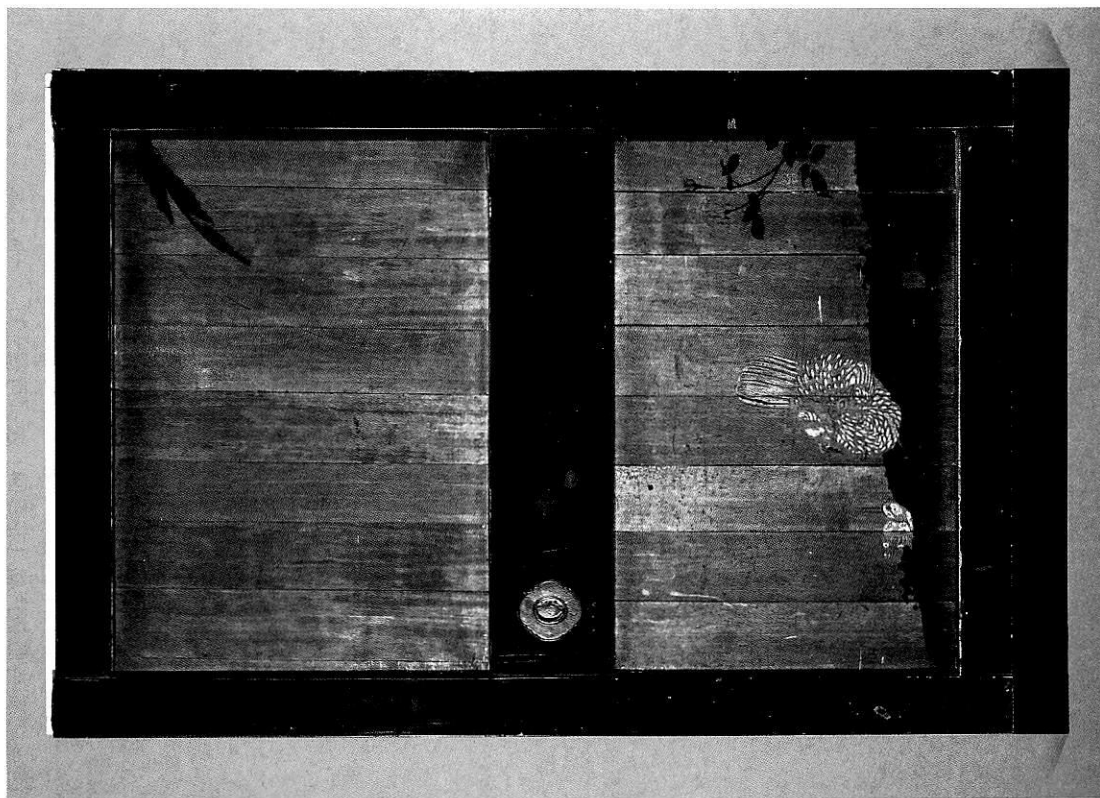


图1 高岸寺藏板戸絵「芭蕉群鶏図」左（可視光）。

Fig. 1 Left side of "Banana plant and Chickens" held by Koganji temple.

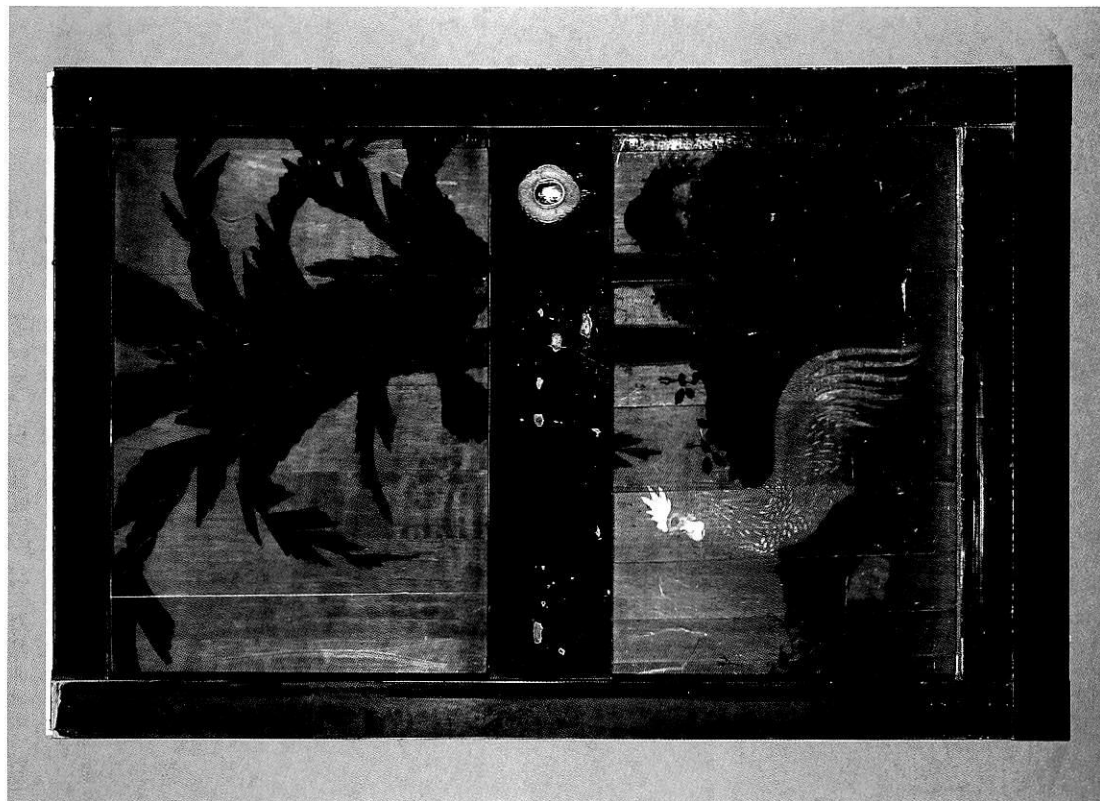


图2 高岸寺藏板戸絵「芭蕉群鶏図」右（可視光）。

Fig. 2 Right side of "Banana plant and Chickens" held by Koganji temple.

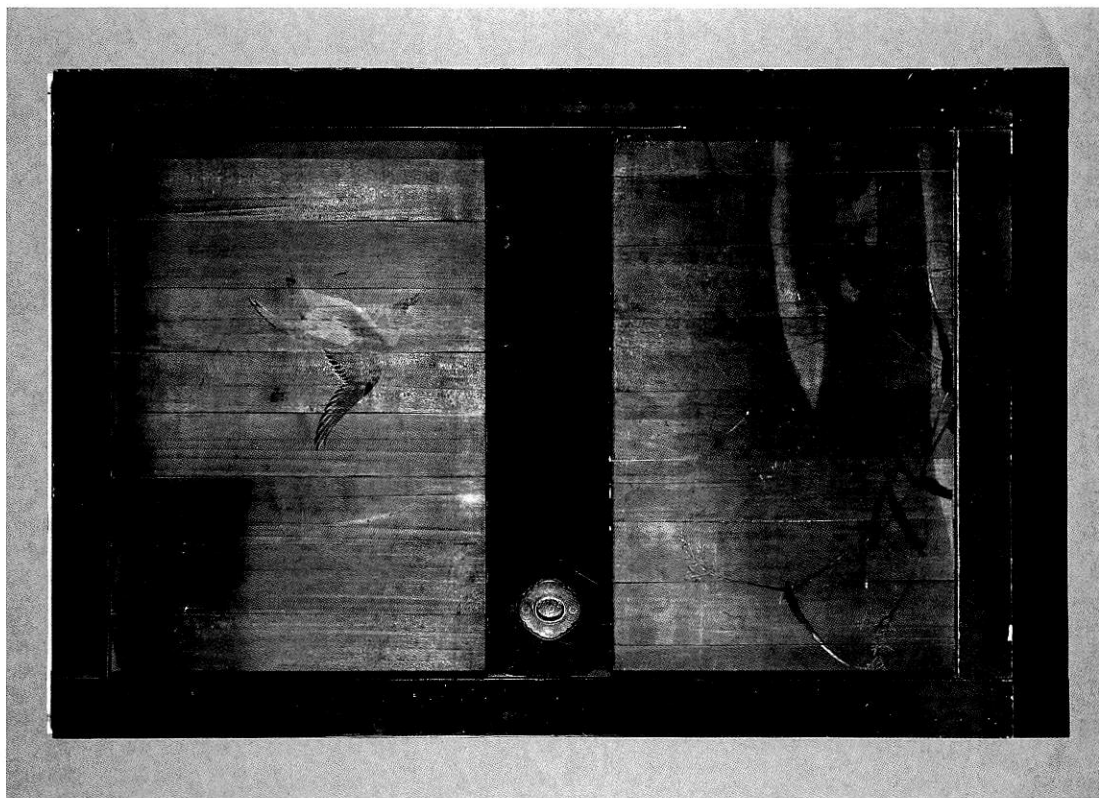


图1 高岸寺藏板戸絵「花鳥図」左（可視光）
Fig. 1 Left side of "Flowers and Birds" held by Koganji temple.



图2 高岸寺藏板戸絵「花鳥図」右（可視光）
Fig. 2 Right side of "Flowers and Birds" held by Koganji temple.

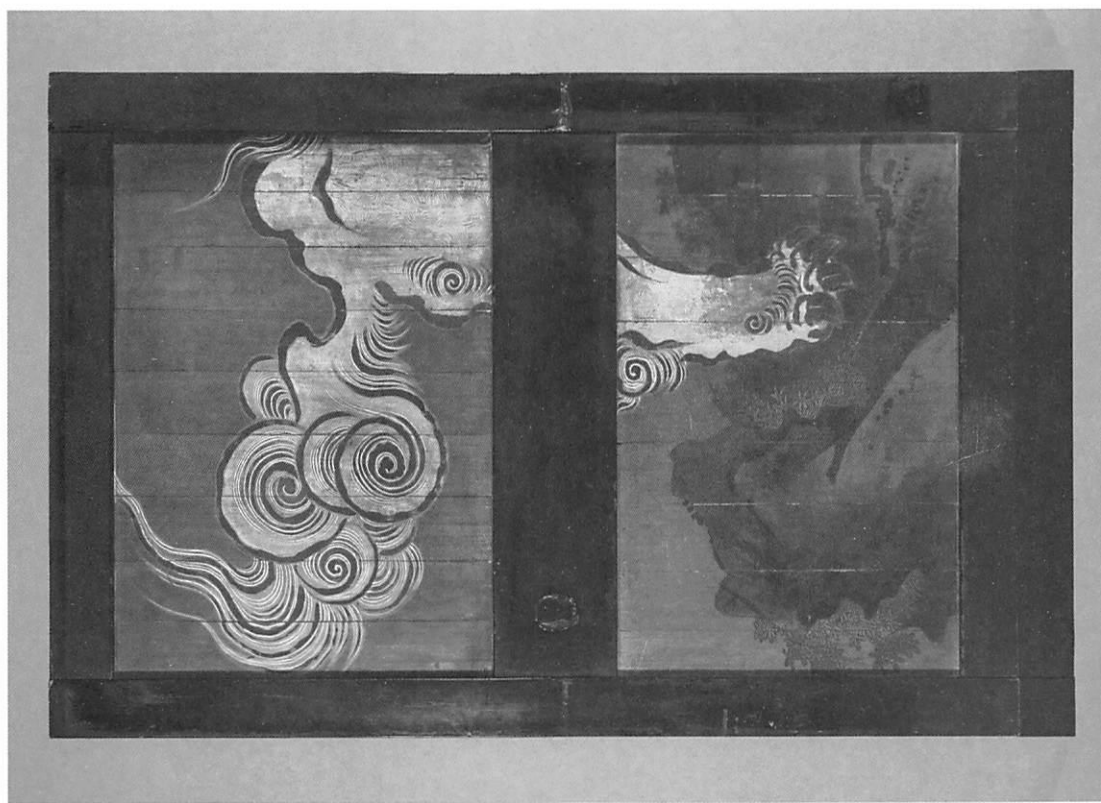


图1 高岸寺藏板戸絵「獅子図」左（可視光）.
Fig. 1 Left side of "Lion" held by Koganji temple.



图2 高岸寺藏板戸絵「獅子図」右（可視光）.
Fig. 2 Right side of "Lion" held by Koganji temple.